

3・4月
合併号

平成20年
No. 365



学校法人 杏林学園 会報



杏林大学入学式

○病院副院長 樋田哲夫教授が逝去	2
○大学の新体制スタート	4
○年度所感	4
○平成20年4月杏林大学入学式	7
○平成20年3月杏林大学卒業式	8
○新任教授紹介	9
○定年のご挨拶	11
○新入職員のみなさまへ	13
○公的研究費の処理で会計検査院から厳しい指摘	14
○平成20年度入試を振り返って	15
○キャリアサポートセンター 就職状況・19年度事業報告	16
〔八王子だより〕	
○保健学部嶋津教授の研究グループ「新機械振興賞」受賞	18
○第4回同窓保健師交流会を開催して	18
○第3回ツインズマーケットを開催して	19
○別科修了式	20

〔三鷹だより〕

○整形外科 丸野助教 米国骨代謝学会から表彰	20
○図書館情報リテラシー教育環境の整備	21
○病院ホームページのリニューアルにあたって	21
○本院の医師と看護師 救助救急演習に参加	21
○看護部自衛消防訓練を実施	22

〔文化・スポーツ〕

○衆議院と憲政記念館見学ツアーを実施	22
○2月の理事会	23
○各種助成金	23
○寄付金・物件寄付申込者芳名	23

〔その他〕

○第37回日本脊椎脊髄病学会のご案内	23
○教職員メディア情報	24

病院副院長 樋田哲夫教授逝去される



2月26日(火)の朝、食道がんのため逝去された本院副院長の樋田哲夫眼科教授の告別式が3月1日(土)、新宿区南元町の千日谷会堂にて盛大に行われました。この日の告別式には、日本眼科学会をはじめとした学会や産業界、そして本学と慶應義塾大学の教職員などの関係者約500人が参列しました。

そして本学の松田博青理事長が樋田教授の業績を称える追悼の辞を述べた後、眼科学教室の平形明人教授が時折涙で声をつまらせながら哀悼の言葉を述べ、参列者全員の涙を誘っていました。前日に行われたお通夜には約800人の方々が参列して樋田教授との別れを惜しんだほか、全国からも樋田教授との別れを惜しむ声が多数寄せられました。

ここであらためて樋田教授のご冥福を心からお祈りいたします。

弔 辞

謹んで樋田哲夫先生の御霊にお別れの言葉を申し上げます。

先生は、去る2月26日病のため亡くなりました。59歳の若さであります。今、在りし日の先生を偲ぶ時、学者としてまた臨床医として、これから人生の大きな華が咲かんとしていた矢先であり、病に抗し切れなかった無念の胸中は察するに余りあります。

先生は、昭和48年慶應義塾大学医学部を卒業し、ドイツのエッセン大学、アメリカのデューク大学への留学を経て、昭和61年8月に杏林大学に赴任されました。

平成6年6月からは教授として、また平成18年4月からは付属病院副院長として、学生の教育、医局員の研究及び臨床の指導はもとより、御自身も眼科医として多くの患者の病苦を救うために、日夜全力を傾けられ、加えて病院の運営にも多大な御尽力を頂きました。同時に学者として先生が日本眼科学会、日本眼科手術学会の理事長を始め数々の学会の役員を歴任され、日本の眼科学及び眼科医療の発展向上のために多大な貢献をされました事は、私共の良く知る処であります。それ故に本学教職員にとりましても、大切な仲間であり大きな星であった先生を失った寂しさを今しみじみと感じております。

この世における人生は、為し遂げなかった多くの事が未完成に終る短くはかないものでありますが、それだけに共に語り共に過ごした日々の想い出が胸に残ります。

先生のこれ迄の私共に対する御厚情に重ねて御礼を申し上げますと共に今は只、肉体的苦痛から開放された先生に新たな永遠の生命と安らかな憩いがあります様にお祈り申し上げます。

また先生が天上から引き続き令夫人・御家族の皆様を見守り、併せて私共の進むべき指針を与えて下さる事を願い、杏林大学関係者一同と共に謹んで弔辞を捧げます。

平成20年3月1日
学校法人杏林学園
理事長 松田 博青

追悼文

樋田先生、先生が亡くなられたことを、まだ信じられない気持ちでいっぱいです。大学でも学会でも、中心的な存在として活躍されており、これからもまだまだご指導いただくべきことは多かったのに、余りにも早すぎる死でした。先生に教えを受けた私たちにとって、先生は偉大な教師であると共に、厳しさと慈愛に満ちた兄あるいは父親のような存在でありました。

先日、先生の主治医であった東海大学の幕内教授から先生の闘病経過を伺いました。樋田先生は食道癌の中でも非常に悪性度の高い腫瘍が昨年8月に発見され、化学療法に始まり、大手術、放射線療法のすべての治療を受けられました。先生は昨年の末にはご自分の病状を全て知らされていたとも伺いました。奥様や家族の皆様、それに私たちに気遣って、まるでご自分は何も気づいていないように振舞っておられました。最後には、全身に転移し、呼吸も苦しかったでしょうに、それを周囲に気づかれないように2月26日午前9時52分、一瞬に逝ってしまいました。

慶應義塾に普通部から学ばれた樋田先生は、慶應義塾高校では応援指導部、医学部では馬術部に所属しま

した。故植村恭夫慶應義塾大学眼科学教授の第一回生として眼科医としてのスタートをきり、慶應眼科で活躍し、角膜格子状変性 type 3 Hida diseaseの発見者にもなりました。その後、米国Duke大学の硝子体手術創始者Machemer教授の下に留学し、2年間で20編の一流学会誌の原著に関与したことは、Duke fellow史の伝説の記録となりました。杏林大学に赴任してからは、専門の網膜硝子体部門を中心に驚異的に手術件数、患者数を増加させ、多くの弟子を育成し、ついにアイセンターを立ち上げました。若くして日本眼科学会理事長や手術学会理事長を務め、大阪大学田野保雄教授らとともに日本眼科学会や手術学会を海外から注目されるような存在に引っ張って下さいました。偶然乗ったタクシーの運転士さんに、杏林は眼科がいいですよ。なんていわれると誇らしくなるのですが、これも先生のおかげでした。アイセンターには、日本のみならず世界中から樋田先生のもとで学びたいというfellowが集まり、彼らが母国や母校に戻って活躍しているのを非常に喜んでいらっしゃいました。

先生が愛した阿佐ヶ谷の鮎屋「千章」で友人になられた作家の村松友視さんが、先生について、「悠然としているのにせっかちで、心やさしくもきびしく、無然たる風(ふう)をよそおいながら、周囲の人々に独特の気遣いを向けられるお人柄。そして、患者さんは、何とも不思議な安心感につつまれ、病をなおそうという気力を手品のように与えられるのだ。」と先日お持ちくださった追悼文の中に表現して下さいました。

先生は物真似が上手でした。嘶家の彦六師匠から医局員や海外の先生方、道行く人までを真似して、周りをなごませてくれました。これは先生のユーモアと観察眼の鋭さによるものと思います。患者さんに対して、眼を診るだけでなく、話しながら、その人となりを観察し、その人にあった説明をされていました。医局員も多様な人材がいるのですが、各人にとってそれぞれの本当の幸せは何かを考えて指導して下さいたように思います。まさに多様な価値観を受け入れる余裕のある最高の師でした。そして、小唄やジャズや三味線、落語を愛する粋な江戸っ子でした。おしゃれで、照れ屋の慶應ボーイでした。

今年はアイセンター10年目です。秋には日本臨床眼科学会の主催を杏林眼科がいたします。教室も同門会も先生を中心に一丸となり、先生が会長として挨拶して下さる日を楽しみにしていましたのに、本当に残念です。心の中にポカリと空洞ができたように寂しいです。しかし、先生が亡くなり、先生のお声が聞けなくなってから、樋田先生の声やお姿が不思議と以前よりそばにあるようにも思えるのです。体という器がなくなったからこそ、先生が光のようにご家族や私たちを包み、私たちの中に入り、身近におられるようにも思えるのです。

いつまでも先生、私たちと共にいてください。私たちを見ていてください。先生と共に歩んできた道をつなげて広げるのが弟子の務めです。教室員一同、先生の下で頑張ります。そして、天国で、おしゃれして、小唄やジャズを思いっきり楽しみながら、応援指導してください。

先生に感謝を込めて、心からご冥福を祈りあげます。

平成20年3月1日
杏林大学医学部眼科学教室
教授 平形 明人

外国からの弔電

Robert Machemer (ロバート・マカマー) Duke (デューク) 大学名誉教授、硝子体手術の創始者
「哲夫が重病であったことを知らず、訃報にショックを受けました。哲夫は皆から愛されていたので、皆が深く悲しんでいます。私は彼の静かな笑顔が大好きでした。そして、彼のプロフェッショナルな能力を尊敬していました。彼は、素晴らしい教育者であるゆえ、特に教え子にとって、かけがえのない先生でした。心より哀悼の意を表します。」

その他にも

Gordon K. Klintworth (ゴードン・クリントワース) デューク大学病理学名誉教授、Einer Stefansson (アイナー・ステファンソン) アイスランド大学前学長、Stanley Chang (スタンレイ・チャン) コロラド大学主任教授、Hilel Lewis (ヒレル・ルイス) クリーブランド大学主任教授、Brooks McCuen (ブルックス・マックイーン) デューク大学教授 など米国、欧州、ブラジル、インド、中国などから多数のお手紙が届きました。

大学の新体制スタート

医学部長・大学院医学研究科長	跡見 裕
保健学部長・大学院保健学研究科長	大瀧純一
総合政策学部長・大学院国際協力研究科長	松田和晃
外国語学部長	赤井孝雄
医学部教務部長・大学院医学研究科教務担当	渡邊 卓
保健学部教務部長	丘島晴雄
総合政策学部教務部長	小野田欣也
外国語学部教務部長	塚本 尋
医学部学生部長	佐藤喜宣
保健学部学生部長	加藤英世
総合政策学部学生部長	原田奈々子
外国語学部学生部長・学長補佐	黒田有子
総合情報センター長	笈川博一

(大学役職者名一覧)

キャリアサポートセンター長	武田耕一
付属病院長	東原英二
看護専門学校長	後藤 元
付属図書館長	神谷 茂
国際交流センター長	本田弘之
入学センター長	岸 邦和
保健センター長	照屋浩司
学長補佐	伊藤泰雄
大学院保健学研究科教務担当	小池秀海
大学院国際協力研究科教務担当(国際開発専攻)	阿久澤利明
大学院国際協力研究科教務担当(国際文化交流専攻)	原田範行
大学院国際協力研究科教務担当(国際医療協力専攻)	高坂宏一

年度所感

医学部長/大学院医学研究科長 跡見 裕



4月になり、新入生とともに新たな教職員を迎えました。心より歓迎いたします。

今日、医学医療を巡る多くの議論がなされております。特に医師の不足からくる多くの問題は、医療崩壊の引き金ともなるものであり、国民の関心も極めて高いものです。当然のことですが、医師の数だけではなく質も重要なことです。私たち杏林大学医学部は、良医を育成していくことを目標としていますが、今年度もこれに向けて更なる努力が必要となります。本年から新入生のオリエンテーションを充実させるべく討議を重ねて参りました。その結果、新入生のオリエンテーションを3日連続して行ない、内容も医療関係者の話だけでなく、患者さんの側からも講師をお願いする等大幅な変更がなされました。“鉄は熱いうちにうて”との格言もあるように、新鮮な感覚を持った新入生が、よりよき医師への道を歩むためのfirst stepとなると期待されます。

昨年より本格的に導入された共用試験(CBT)や、客観的臨床能力試験(OSCE)は学生の臨床能力を高めるものとなりますが、その実施に関しては教職員の方々の並々ならぬご尽力が必要です。

大学院については、いわゆる社会人入学制度を実施するための準備が始まります。さらに、高度専門医養成制度についても検討をしなければなりません。

また、本年度は教務部長が伊藤教授から渡邊教授、学生部長が藤岡教授から佐藤教授にかわりました。前任者のご努力に感謝するとともに、新しい方々の今後の活躍を期待しております。

医学部には多くの課題が山積しておりますが、一つ一つを着実に解決していきたいと考えております。教職員の皆様のご理解とご協力をいただきながら、すすめていく所存ですので、何とぞよろしくお願いいたします。

年度所感

保健学部長/大学院保健学研究科長 大瀧 純一



保健学部は建学の精神である「真・善・美の探究」という大きな理念を基に、健康をテーマとして、社会の要請に応えられる優れた人材の育成を目指しております。幸いなことに卒業生の評価は非常に高く、社会の要請に十分応えていると思われます。今年度も多くの受験生が集まり競争率も高くなりましたが、その大きな要因の一つに卒業生の様々な分野での活躍が挙げられ、本学部の評価が高まっていることが大きいと思います。

現在、臨床検査技術学科、健康福祉学科、看護学科、臨床工学科、救急救命学科の5学科に分かれておりますが、来年度は看護学科が三鷹キャンパスに移転する

ことが決まっております。今年度は看護学科だけでなく、学部全体が大いなる飛躍を求めて動き出すこととなり、新しい世界に向けての助走段階になります。4月から新たに加わっていただいた教員、職員共々力を合わせて、一歩ずつ進んで行きたいと思っております。

この1～2年様々なメディアで報道されていますように、少子化の影響で大学全入時代と言われております。本学を取り巻く環境も決して予断を許すような状況ではありませんが、このような時こそ教職員が一致団結し、新しい時代にふさわしい学部を築いていきたいと思っております。今年度も本学部へのご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

就任にあたり

総合政策学部長/大学院国際協力研究科長 松田 和晃



総合政策学部長ならびに大学院国際協力研究科長を拝命し、その任の重さに身の竦む思いですが、教職員の皆様のご協力を得て、微力ながら任務を全うしたく存じます。

総合政策学部は、現代社会のトレンドを鋭く分析しながらミクロとマクロの両方の社会的要請に応える人材の育成を目指していますが、特に、初年次教育の強化による中途退学の予防に重点を置くとともに、公務員試験や簿記検定などの対策を強化したカリキュラム編成を行って、入学から卒業までのきめ細かい指導を実現しております。

また大学院国際協力研究科は、広く国際的な視野に立って海外との友好的協力関係の維持・発展に寄与する高度な能力を持った人材の養成を目的とし、国際

言語コミュニケーション専攻設置の準備や研究成果を社会に公開・還元する機会のさらなる増加などを推進しております。

御陰様で今春の入試受験者数は前年を上回りましたが、常に社会的要請や学生のニーズに応じた新たな試みを重ねつつ、ひろく社会に存在を主張していくことが、評価を一層高めるための最上の策であると考えております。そして学部と大学院、この両者の有機的かつ効果的な協力関係こそ、今後の発展に欠くべからざるものと位置づけ、相互に補完・活用しうるような具体的プランの策定と実行を、積極的に推進しようと考えておりますので、なにとぞご支援を賜りますようお願い申し上げます。

就任にあたり

外国語学部長 赤井 孝雄



外国語学部は今年設立20周年を迎えました。英米語学科・日本語学科・中国語学科の3学科でスタートした学部も、その後、外国語学科の1学科制に移行し、2006年より、現在の英語学科（英語ビジネスコミュニケーションコース・英語教育コース）、中国語・日本語学科（日本語教育学コース・中国語ビジネスコミュニケーションコース）、応用コミュニケーション学科（表現メディアコース・観光文化コース）からなる3学科6コース制に姿を変えてきました。時代や社会の要請、そしてなによりも学生諸君のニーズに応えるべく、学部は変化し続けてきた訳ですが、「外国語の習得を通じて・・・異文化の垣根を越えて相互に理解し共存できる人間性そのものを陶冶し、」真の国際人を養成するという根本理念は20年前と少し

も変わるものではありません。

生き残り、全入時代といった言葉で象徴されるように、学部の置かれている状況は「厳しい」の一言に尽きるでしょう。しかし、この20年間学部が維持してきた理念と実績に誇りを持ち、浮き足立つことなく腰をすえて、教育に取り組むことが何よりも肝要だと考えます。そのためには、学習目標の設定とその成果の検証、学生の視点にたったきめ細かな教育、社会人力の養成、導入・初年次教育による高大連携などが重要課題であると認識しています。

外国語学部長を拝命するにあたり、その責任の重さに身の引き締まる思いです。教職員の皆様のご教示、ご協力をいただきながら、鋭意努力をしていく所存ですので、どうか宜しくお願い申し上げます。

就任にあたり

医学部附属看護専門学校長 後藤 元



この度看護専門学校の学校長を拝命致しました。大学では、第一内科で呼吸器病学を担当しております。昨今、巷では、「医療崩壊」という言葉が現実のものとして語られている、その時においての就任であり、身が引き締まる思いがしております。

さて、杏林学園におきましては、来年度から保健学部看護学科が三鷹キャンパスに移転する予定となっており、同じキャンパスで教育が行われることとなります。これを、看護教育において、杏林学園の医療資源を有効に利用できる機会と捉え、お互いの協力を通して、看護専門学校のますますの発展に結びつけられればと考えております。

また来年度、平成21年は、本校のカリキュラムが

全面的に刷新される年にも当たっております。医療内容の急速な進展、あるいは、かつて経験したことのない高齢化社会の到来を背景とし、看護教育においても新たな時代への対応が強く求められている状況に基づいたものであります。幸い新カリキュラムについては、前任の呉屋朝幸校長のご尽力により、その作成が順調にすすんでおります。その骨子に肉付けを進め、昭和50年の開校以来、33年に及ぶ輝かしい伝統の上に、杏林学園ならではの看護専門学校としてさらに評価を頂けるよう力を尽くして参りたいと存じます。そのためには、皆様のご指導、ご鞭撻が不可欠であります。お力添えのほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成20年4月杏林大学入学式



杏林大学入学式が4月6日（日）、三鷹キャンパス・松田記念館で行われました。本学はこの春、大学院が医学研究科10人、保健学研究科17人、国際協力研究科32人、学部が医学部95人、保健学部357人、総合政策学部342人、外国語学部327人、それに看護専門学校108人の、合わせて1288人を新たに迎えました。

式では、松田和晃総合政策学部長の学事報告に続き、松田博青学園長・理事長が「皆さんが将来活躍する場である社会は、中身の充実した人を求めています。私どもは皆さんのさまざまな活動に対し、で

きる限りの支援をしていきたいと思っております。皆さん方が学生生活を充分に楽しみながら、かつ自分の中身を充実するよう努力されることを期待しています」と新入生を歓迎しました。

つづいて長澤俊彦学長が「今の日本はなんとなく閉塞感が漂い、ともすると自己中心的に過ぎがちな世の中で、皆さんぜひ利他的、すなわち自分以外の人たちのことを思いやる心を持って学生生活を送っていただきたいと思います。」と式辞を述べました。

また教職員を代表して、金田一秀穂外国語学部教授が「本当のことというのは、とても小さな声で語られているということを覚えておいてください。そして、その小さい声を聞き分ける能力をこの大学で学んでください。我々はそのお手伝いを一生懸命したいと思います。」と祝辞を贈りました。閉式後、新入生たちはキャンパス内に咲き誇る桜を背景に御両親などと一緒に記念撮影を行うなど、入学の喜びを分かち合っていました。

松田博青学園長・理事長式辞

中国・韓国・ベトナム・台湾からの留学生62名を含めまして、今年も新しい学生をこの学校にお迎えできたことを嬉しく思っております。

この学校は1966年、松田進勇によって創設されました。その建学の精神は「真・善・美の探究」であります。この解釈につきましてはいろいろあろうかと思いますが、私は学問をして、人の為に尽くすことだろうと思っております。

現在この学校は、大学院に3研究科、大学に4学部11学科、それに付属の専門学校を擁し、院生・学生総数はおよそ5千人強であります。私どもは、皆さんをこの学校にお迎えして、まず皆さんと一緒に今までの方々が苦勞して積み重ねてこられた真理・学問・作品・技術・学説等々を共に学び、可能であればそこに新しい1ページを加えたいと思っております。また一方で、皆さんは数年後には社会に出て活躍するはずです。皆さんを受け入れる社会は、

皆さんが学生時代に勉強の傍ら、自分の中身を充実してから社会に来るように求めています。そのために社会は皆さんに、社会人よりもはるかに多くの自由な時間を与えているはずであります。自分の中身を充実するためには、例えば自分でものを考え、自分の意見を自分の言葉や文字で表現する、或いは自分の学んでいる分野とは違う作品に接する、或いはコンピュータ等を含めた機械類の技術を学ぶ、或いは語学その他の検定試験を受けて資格を取る、或いはボランティア活動をする等々、さまざまでありまうけれども、私どもは皆さんが自分の意志でそうした活動をする場合には、できる限りの支援をしていきたいと思っております。

皆さん方が学生生活を充分に楽しみながら、かつ自分の中身を充実するよう努力されることを期待して私の歓迎の挨拶と致します。

長澤俊彦学長式辞

留学生63名、社会人入学17名を含む大学院3研究科、4学部、看護専門学校に入学された皆さん、杏林大学は皆さんを心から歓迎します。

杏林大学は1966年に故松田進勇先生によって開設

されました。私立の学校にはすべて建学の理念がありますが、本学の建学の精神は「真・善・美の探究」です。真とは真摯な態度で学問すること、善とは倫理観の高い人格形成を育むこと、美とは美しい生き

方を追及することです。この建学の精神を堅持しつつ、21世紀型市民として相応する人材を育成することが杏林大学の教育理念です。

大学院に進まれた皆さん、本学は高度専門職業人の養成を主眼にしています。夫々の選ばれた指導員のもとで目的を達成されることを希望します。4学部、看護専門学校に入学された皆さんには三つのことを実践していただきたいと思います。第1は絶えずグローバルな視野に立って学問することです。第2は学習成績の向上は出席率と平行します。全出席を心がけることです。第3は学歴よりも学習歴が重視さ

れる時代です。どこの大学のどの学部の出身であるという肩書きよりも、どこの大学で何の学位を取得したかが社会から問われることを念頭に置いて学問することです。ちなみに本学学部では八つの学位を用意しています。

今の日本、特に都市部で生活していると、とすると自己中心的に物事を考えて行動しがちです。入学生諸君はぜひ利他的、すなわち他人を思いやる心で物事を考えて行動し、三鷹、八王子キャンパスで充実した楽しい学生生活を送っていただくことを願います。

平成20年3月 杏林大学卒業式



暖かく穏やかな日和となった3月18日（火）午前11時から杏林大学卒業式が八王子キャンパス 松田記念館で行われ、学部・大学院を修了した1090人に学位・卒業証書が授与されました。この日卒業式に臨んだのは、医学部83人、保健学部239人、社会科学

部・総合政策学部328人、外国語学部300人、医学部附属看護専門学校83人、医学研究科20人、保健学研究科8人、国際協力研究科29人です。会場は袴姿の女子学生やスーツ姿の男子学生で一際華やいだ雰囲気となり、2階の観覧席からは教職員やご父母が卒業生の門出を祝いました。

式では松田博青学園長・理事長が「混沌とした社会の中で、皆さまが生きていくためには、溢れる情報を取捨選択する知恵と辛くとも投げ出したりしない根性が必要です」と卒業生を激励しました。続いて長澤俊彦学長は、卒業生がこれから社会で活躍するために「3つのC（communication, compliance, challenge）」を実践してほしいとメッセージを送りました。

松田博青 学園長・理事長式辞

この学校の所定の課程を経て、社会人としての新しいスタート台に立つ皆さまに、まずお祝いを申し上げます。

皆さまがこれから活躍する社会は、学生時代の社会と大きく異なっています。皆さま方の態度・身なり・言動その他は全て個人の責任に帰せられるところであります。これからの社会は一言で言えば不透明で何が起こるかわからないような社会であります。国内では物価・原油の上昇、あるいは親族間の殺人事件等々が多発しており、また海外では暴動、テロ、金融不安、環境汚染等々が頻発しております。こうした混沌とした社会の中で、皆さまが生きていくためには、それなりの知恵と根性が必要です。現在、マスコミ、新聞、週刊誌、雑誌あるいはインターネット等々から山ほどの情報が溢れ出ております。これらの溢れる情報の中から、自分に必要なもの、大事なものの、正しいものを取捨選択して、それを活用

する知恵が必要です。

また、社会は学生時代と異なり、嬉しいことや喜ばしいことよりも、辛いことや苦しいことの連続です。このような時に皆さん方が安易に近道を探したり逃げ出したりせずに、歯を食いしばってでもその暗い道を歩みつづける根性が必要です。このことによってやがて光が見えて来るのです。

皆さま方が自分を信じて、自分を頼りにして、努力をして、やがて一定の年月が経ちますと少しゆとりが出てきます。このときに皆さま方は、自分たちがいかに恵まれているか、自分たちより恵まれない、弱い人々がいかに多くいるか 気が付くはずですが、このときに皆さま方が手を差し伸べることができる、これが社会が最も必要とする人材です。

皆さまが自分の健康に留意して、精一杯活躍して、最終的に社会が求める人材に成長することを期待して私の挨拶と致します。

長澤俊彦学長式辞

杏林大学大学院3研究科で博士、修士、4学部で学士の学位記、看護専門学校で専門士の卒業証書を取得され、本学を巣立って行く1090名の皆さまの門出を心からお祝い申し上げます。

21世紀の社会は何大学の何学部を出たかという学歴ではなく、何の学位を取得したかの学習歴に価値がおかれる時代です。今日皆さまが手にした卒業証書を見て、自分の得た学位の重みを充分にかみしめて下さい。

皆さまがこれから出てゆく社会は政治、経済、その他のあらゆる分野で国の内外ともに極めて厳しい状況にあります。このような社会情勢の下で組織に入って新人として活躍してゆくのにどの分野にも共通する大切なことは何でしょうか。それは英語のCの頭文字で始まる三つのことを実践することだと思います。第1はcommunicationの徹底です。たとえば、今の医療はチームワークです。患者さんとのみならず、職種の異なる医療スタッフ間のcommunicationが円滑でなければ重大な医療ミスにつながりかねません。第2はcompliance、すなわち法令順守の精神を尊重することです。平たく言えば、社会生活を行ううえのルールを守ると同時に法令をきちんと守って行動せよということです。法令順守は決して管理職だけの問題ではありません。

ません。Communication, complianceを実践してから大切な第3のCはchallengeです。ノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈博士は新しいことに挑戦するには、今までのしがらみ、大先生の権威にのめりこむだけでなく、子供のようなあくなき好奇心と初々しい感性を持つてことに当たれと強調されています。自分は何をしないと責任を問われるのかではなく、自分は組織の中の今の立場で何ができるのかを絶えず考えて行動することが大切です。

ところで、世界では飢えや貧困、感染症に苦しんでいる人がたくさんいます。それに比べて日本はどうでしょうか。なんでも手に入る飽食時代で、メタボ、メタボと騒がれています。若いときの暴飲、暴食、過度の喫煙の付けは必ず中年以降にやってきます。超高齢化社会を迎えた日本では健康を維持して健やかに年老いてゆかないと自分も周囲の人も、また社会も不幸になります。自分の健康は自分でしか守れません。皆さまの年齢から健康の自己管理に十分注意してください。

杏林大学の三鷹、八王子の両キャンパスで培ったことを精一杯活用してこれからすばらしい人生を送られることを切に願います。

新任教授紹介

平成19年12月1日付けで医学部内科学I（神経内科）教授に千葉厚郎先生が、平成20年3月1日付けで医学部内科学教授に古瀬純司先生、保健学部臨床検査技術学科教授に潮見泰藏先生がそれぞれ就任されました。三人の先生の抱負をご紹介します。



所 属
生年月日
最終学歴
職 歴

千葉 厚郎 教授

医学部内科学I（神経内科）

昭和34年10月12日

昭和60年3月 東京大学医学部卒業

昭和60年 東大病院神経内科・内科、昭和61年 公立昭和病院脳神経外科、昭和62年 東大神経内科入局、昭和63年 日赤医療センター神経内科、平成元年 虎の門病院分院神経内科、平成2年 東大病院神経内科、平成5年 東大医科研糖鎖生物研究部、平成6年 都老人研糖鎖生物研究部、平成8年 ニューヨーク大学メディカルセンター薬理学教室、平成11年 東大病院神経内科、平成12年 杏林大学第一内科講師、平成14年 同助教授。

抱負

このたび第一内科の神経内科部門の臨床教授を拝命致しました。宜しく御願い申し上げます。付属病院においては一昨年の8月から神経内科の診療科長を務めさせていただいておりましたが、さらに臨床神経学の第一人者たるべきとの自覚を持って本学の発展に貢献できますよう努力する所存でございます。

新たな脳卒中診療体制が始動し、現在着実に成果を上げております。当院における脳卒中診療の基本的なスタイルはほぼ確立されたのではないかと思います。この間の関係の方々の御努力に深く敬意を表しま

す。我々神経内科も引き続きこれに参画し、その更なる発展に貢献していきたく思います。

病院機能評価に向けて各科の診療理念が出されておりますが、私共は「かかって良かったと思える医療を提供する」といたしました。神経内科は最も多くの難病を抱える診療科の一つです。そのような治療の困難な病気の方々についても、私共に御相談いただいて何か一つでも「良かった」と思っていただくことが出来るような診療を心掛けたく思います。

また、近年の画像・生化学的な病態解析の進歩をふまえて、これからの世代の方にとって神経学がより魅力あるものとなるよう、教育・研究に努めたく思います。



所 属
生年月日
最終学歴
職 歴

古瀬 純司 教授

医学部内科学（腫瘍科）

昭和31年7月17日

千葉大学医学部卒業

昭和59年千葉大学医学部附属病院にて研修。その後昭和60年清水厚生病院内科、昭和62年千葉大学医学部第一内科、平成2年社会保険船橋中央病院内科、平成4年国立柏病院内科を経て、平成4年7月国立がんセンター東病院の開院から参加（臨床検査部医員）。平成11年より同病棟部医長。その間、平成13年9月より1年間、米国トーマス・ジェファーソン大学に留学。

抱負

このたび内科学の腫瘍科を担当することになりました。日本の医学教育はこれまで臓器・疾患ごとの体系に行われてきました。その中で各臓器の特徴を基礎にがんを診療・研究するメリットは大きいと考えられてきました。きめ細かい診断や外科・内視鏡・放射線インターベンション治療などその典型です。

しかし、最近がんの分野は腫瘍学（oncology）としてすさまじく進歩しており、oncology全体を体系立てた教育や診療・研究の必要性が高まっています。特に化学療法の進歩は著しく、有効性も向上した一方、適応や毒性など益々複雑になってきています。さらに分子標的薬など新しい概念の治療薬も次々と登場しています。米国では内科学の一部門として腫瘍内科が独立したシステムであり、化学療法の開発や診療などにその強みを発揮しています。

今回、杏林大学に腫瘍科として化学療法を中心にがん全体を扱う部門が立ち上がり、その責任者として任を果す機会を得ましたことは大変光栄であり、また責任の重さをひしひしと感じております。がん診療は特にMultidisciplinary Teamworkingが必要な分野であり、外科、内科、放射線科、病理など基礎医学、看護、ソーシャルワーカーなど多くの部門の協力によって成り立っています。そのような包括的ながん教育・診療・研究の一翼を担えればと考えております。皆様のご協力、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



所 属
生年月日
最終学歴
職 歴

潮見 泰蔵 教授

保健学部臨床検査技術学科

昭和31年1月24日

杏林大学大学院保健学研究科博士課程修了

埼玉医科大学附属病院に勤務後、埼玉リハビリテーション専門学校専任教員、埼玉医科大学短期大学講師を歴任。1997年国際医療福祉大学保健医療学部講師、1999年同助教授を経て2006年同教授。

抱負

現在、臨床検査技術学科に所属し、平成21年4月開設予定の保健学部理学療法学科の設置準備の仕事をしております。保健学部は既に医療専門職の教育には伝統と実績がありますが、リハビリテーション医療の専門職を養成する課程を設置するのはこれが初めてとなります。理学療法士の職域については医療機関はもとより、地域医療、特に在宅や社会福祉施設にいたるまで幅広く、まだまだその需要は大きい状況にあるといえます。一方、近年では理学療法士の養成施設が急増しており、それに伴って、質の低下を危ぶむ声も聞かれます。杏林大学は理学療法士養成施設としては後発となりますが、既設校に劣らぬ特色ある学科となるよう努力していきたくと思っております。

皆様のご指導とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

定年のご挨拶

平成20年3月末日をもちまして、定年で学園を去られる先生方に学園での生活を振り返られた感想などをいただきました。長きに渡り学園の発展に寄与していただき、ありがとうございました。

定年にあたって

医学部教授 中林 公正（第一内科）



私が杏林大学に就任致したのは、昭和46年4月10日で第2期生が入学した年でありました。当日、先代の松田進勇理事長先生から辞令を頂戴致しましたことを鮮明に記憶しております。以来、37年間診療、研究、教育に従事してまいりました。この間に、学園は急速な発展を遂げて、今日に至っております。現在では、創立期の状況を知っている人々も非常に少なくなっていると考えます。そこで、当時の状況を少し記述させて頂き、定年に当たっての詞と致したいと考えます。

当時は、一般病棟用の4階建ての建物が200床程でコの字型に存在し、それに臨床検査技師短期大学（4階建1棟）が併設されている状況でした。裏手には木造の2階建ての精神科病棟の3棟（370床）と結核病棟の1棟（50床）が存在し、その前方には広い雑草の生い茂る敷地になっておりました。この様な状況から、漸次新病棟、外来棟、図書館を含む中央本部棟、…の新設・改築を繰り返して今日の大学の全体像に至っております。

この様な発展を遂げることができたのは、理事長先生の御指導の下に教職員の皆様日々御尽力した結果だと思います。これからも益々発展していくことと存じます。

長い年月に亘り皆様本当に御世話になりました。心から御礼を申し上げます。最後に、理事長先生を始めとする教職員の皆様御健勝と御活躍を祈念し、退任の御挨拶と致します。

定年を迎えて

保健学部教授 金森 政人（臨床微生物学教室）



1972年に医学部微生物学教室に着任以来、36年もの長きにわたり、ご指導を賜りましたことにまず感謝申し上げます。この間、多くの学生と出会いと別れを繰り返してまいりました。また、多くの教職員の方に暖かく接していただきました。一つひとつが、昨日のことのように頭をよぎってまいります。

研究に集中できた若かった時代が、一番楽しく思い出されます。実験動物を相手に、エルシニア症やマイコプラズマ肺炎の発症メカニズムの解明に取り組んで

おりました。

1988年に、保健学部へ異動となりました。はじめの数年间は、授業や実験を通して学生と楽しい時間を持つことができました。ところが、勝目卓朗先生が突然ご病気になられ、学部長を拝命いたしました。看護学科が開設された年でした。それから7年半、頑張ったつもりではありますが、多くの方々にご迷惑をおかけしたと思います。ご支援に改めて感謝いたします。

大学は厳しい時代を迎えております。最後の2年間、就職支援の仕事をさせていただきましたが、時代の変化に対応でき、社会の要請に応える人材の養成に最も大切なことは、「基礎・基本」をいかにしっかりと教えるかにかかっていることを実感いたしました。教育に対する情熱と研究に対する貪欲さがある限り、大学の未来は明るいと感じております。

学園のご発展と皆様のご活躍をお祈り申し上げます。



私は平成4年10月に保健学部疫学教室の助教授として着任し、翌年4月には臨床遺伝学教室の教授に就任させていただき頑張って参りましたが、この3月に無事定年を迎えることになりました。15年半の間、さまざまなことがありましたが、教室員、学生と共に楽しく有意義に過ごすことができましたことを感謝いたします。

私は20年余りの長い間、米国の大学で研究と教育に携わっておりました。帰国直後は何かにつけてとまどうことばかりでした。最初の年から数名の大学院生と数名の卒研究生をかかえ、とにかく毎日がてんてこ舞いでした。おまけに転倒事故で圧迫骨折をしてしまい、修士論文の発表の指導は病院のベッドでという有り様

でした。学生達の思いやりと優しさに泣かされたこともありました。

講義・実習は分子細胞生物学、臨床遺伝学、遺伝子検査法を担当しました。非常に進歩が早い分野ですが、基本となる考え方と共に最先端の事柄について精一杯準備し講義をしました。学生達の感想文に労いの言葉をしばしば発見して癒されました。研究面では2つのテーマ：多発性嚢胞腎の遺伝子検査法の確立、ダウン症関連遺伝子の機能解析を行ってきました。どちらも国の科学研究費や学園からの支援に恵まれ、定年まで先端研究を進めていくことができました。ヒトゲノムの解読が完了されたものの、まだまだ未解明の興味ある事柄が満ちあふれています。私はこれまでの経験を少しでも保健医療に役立てたいと研究啓発活動を続けていこうと思っています。

杏林学園のさらなる発展と皆様のご多幸を心から願っております。多くの方々にお世話になりました。本当にありがとうございました。

退任にあたり



On a sunny April morning almost 17 years ago, I first arrived at the Mitaka campus to join in the ceremonies for new faculty members. As a newcomer to the Faculty of Foreign Studies, I had little idea of what exciting times lay ahead!

Our faculty has faced many challenges. I am especially happy to have been a part of two in particular. One is the ongoing revision of our curricula to better address the changing needs of our students. The other is the establishment of the Graduate School with its emphasis on international development and cooperation, a mission that is close to my heart.

Most of my professional career, I have taught composition and communication skills. About ten years ago, my interests also turned to the

emerging field of popular culture studies. And with the support of the University, I developed several new courses at both the undergraduate and postgraduate levels, using popular culture as a basis for cross-cultural comparisons. The positive response of our students to these courses has been very rewarding.

After retirement, I will continue to serve as a member of the editorial board of the *Journal of Popular Culture* and to pursue my interests in culture studies.

On a personal note, I am looking forward to returning to live in my home, the United States. I hope to travel, enjoy the company of old friends, and play with my grandchildren.

I will always remember Kyorin University with deep gratitude. I chose to enter a profession dedicated to helping young people achieve their potential, and I thank the University for giving me the opportunity to carry out this work with so many wonderful people.

To all my dear friends and colleagues, I wish to also say a heartfelt “thanks” for your support, generosity, and kindness through the years. I will miss you and wish you the best of everything.



昭和48年より医学部で、昭和59年から保健学部で合計35年間勤務させていただき定年退職を迎えました。担当した教育は解剖学で、医学部では顕微解剖学（組織学）、保健学部では肉眼解剖学と組織学の両方です。保健学部ではその他、特別演習として「電子顕微鏡学実習」を担当いたしました。研究面では「上皮細胞の発生及び悪性化と形質膜変化に関する組織化学」をテーマとし主に電子顕微鏡を用いて研究いたしました。

大きく発展をしてきました杏林学園に勤務させていただいたことを大変誇りに思いまた感謝しております。又、医学部時代の解剖学教室教授の平野寛先生、保健学部時代の病理学教室教授の深井孝次先生を始めとして教室員及び他教室の皆様、大学事務職員の皆様のご指導、ご援助を心から感謝申し上げます。

心に残る思い出としては、教職員の皆様から温かい言葉をいただいたこと、卒業研究生や特別演習の学生との楽しい語り合いのことが思い浮かびます。

今後は、医学部解剖学教室で実習（前期は肉眼解剖学、後期は組織学）のお手伝いをさせていただけることになり楽しみにしております。今後も皆様のご指導、ご援助をお願い申し上げます。

これからの杏林学園のますますのご発展、皆様のご活躍を心より期待しております。

新入職員のみなさまへ

八王子事務部長

キャリアサポートセンター室長 齋藤 幸雄

新入職員のみなさま本学へのご入職おめでとうございます。

多くのみなさまが、付属病院の仕事に従事されることになると思いますので、八王子キャンパスで仕事をしている私は、みなさまと顔を合わせる機会が殆どないこととなりますが、本学で仕事をする先輩としてメッセージを贈ります。

近年、仕事や生活をするうえで大きな変化をもたらしたものがインターネットです。

瞬時にして世界中の情報を得ることが出来、また商品購入や決済もネットを介して短時間で用事を済ませることが出来ます。

極論ですがITの発達によって仕事も生活も直接的に人と係わらずとも出来る時代になってきました。このような変化と同調するかのごとく日本の就業人口はサ

ービス業で働く人達が最も多くなりました。不特定多数のお客様にサービスを提供するにはネットは便利ではありますが、私たちの仕事の多くの時間は患者さん、大学では在学生に知識や技術、技能などを提供して、その対価を診療代や学費として受け取っています。さらに当学園の運営にご協力いただいている取引先の皆様や地域の方々との良好な関係が大切です。

ITの進化は、これからも仕事を効率的にすすめるツールとして有効に活用しなくてはなりません、私たちが対面するお客様には相手の要望、心を察して満足いただける仕事を提供する。その為には常に自分を高める目標をもって仕事に就かれることを期待しております。



公的研究費の処理で会計検査院から厳しい指摘

学長 長澤 俊彦
事務局長 堀 和生

本学は、去る2月18日から22日までの5日間にわたって、会計検査院の实地検査を受けました。今回の検査の対象は研究領域に係る補助金で、平成14年度から18年度にかけての文部科学省、厚生労働省それぞれの科学研究費補助金、独立行政法人等からの受託研究費等が適性に使われ処理されているかというものでした。

本学では今回の会計検査にあたって事務部が13人の職員による特別チームを編成して準備に当たるとともに検査における説明役を務めました。

検査では調査官から支出を裏付ける証拠書類等の提示が徹底的に求められました。中には取引業者の売上台帳などを取り寄せるよう要請される場面もあり、当然ながらごまかしや取り繕いは許されない厳しいものでした。

最終日に検査が終わるにあたって調査官は口頭で「公的研究費は、国民の税金から交付されているのであるから、使用ルールを遵守すると共に節約に心がけ効率的に活用を図っていただきたい。従って、研究者(教員)と研究機関(大学)は、国民に対して説明責任を有していることを常に認識していただきたい。」としたうえで、以下の3点を指摘しました。

1) 間接経費(※(1))

間接経費は研究機関へ事務委任(※(2))していることを前提に、研究機関の管理等に必要な経費として交付しているものであるが、研究者が使っているなど使用方法が通知等に定める使用に即していない例がある。また、支出内容も間接経費では支出できない直接研究費の消耗品等に係るもの又は当該研究課題に該当しないと思われるものに使用されている。さらに、当該直接研究費(直接研究に必要な経費)の支出についても研究機関が責任を持って管理及び経理を行わなくてはならないが、事務委任は形式に行われているだけで実態がない。

※(1) 間接経費とは、直接研究費等による研究の実施に伴う研究機関の管理等に必要な経費として、研究者から配分を受け、研究機関が使用する経費とする。(主な使途の例示・・・管理部門にかかる施設・設備の整備、維持及び運営経費/管理事務の必要経費～備品、消耗品、雑役務、人件費、会議費等)

※(2) 事務委任とは、研究者から委任を受けた研究者の所属機関の長の責のもと、その機関において、当該研究に係る直接研究費等の管理及び経理の事務を行うことをいう。

2) 謝金

研究協力者等に支払われる謝金の管理が領収書以外に何も残されない方法で行われている。いつ、どのような労務の提供に対するものなのか証拠書類のない状態で事実確認ができない。また、この処理が立替となっているが立替原資出所も不明で、立替事実の確認もできない。

3) 航空運賃

出張時の航空機利用に関し、航空運賃が一般料金で支払われている。

昨今、航空運賃は、時間帯・季節等に応じて様々な割引料金が設定されているので、航空券半券と領収書添付による実費の清算が適切である。

この他、5日間の検査の中で指摘された主な事項は以下の通りです。

- ・主任研究者として班会議を宿泊で主催し、宿泊費込みの参加費を設定のうえ、一部の参加者に研究費から参加費を支出しているが、参加費の内容に懇親会等が含まれていれば、この分の研究費支出は認められない。
- ・納品書への日付記載漏れが目立ち、調査官は、取引業者から売上台帳を取り寄せて確認していた。
- ・マウス・ラット等の実験動物購入に関し、確かに納入されたかどうかを検収者の所属と発注研究室との関連を調べて確認していた。
- ・アイソトープ購入・使用実績・廃棄の判別できるものの確認が行なわれ、管理台帳の提示が求められた。
- ・2課題抱えている研究に関して、両者の報告書作成費用をまとめて1課題分の研究費から支出している事例

があり、これは別課題分が目的外の支出となるとの指摘があった。

- ・研究室在籍の大学院生（研究協力者）名義発注の消耗品申請書に対し、個人の学位論文作成による研究のためか当該研究協力のための支出であるかを確認するため、学位論文の研究課題を提出するよう求められた。
- ・多額（120万円）の立替の原資が自己保有現金であるとの説明に対して、それを証明する裏付けが求められた。
- ・出張に関し、出張命令簿（学会等出張許可申請書）、出張報告書、出勤簿等の整合確認が行われていた。
- ・列車のグリーン料金、飛行機のビジネス料金は、支給が認められないので注意することが強調された。
- ・特に年度末に切手を大量に購入する事例があるとして、切手又は有価証券の受払い簿を提示するよう求められたが、受払い簿による管理を行っておらず、注意を受けた。
- ・外国人研究協力者について、雇用期間に対応する在留資格を示すよう求められた。
- ・研究分担者の分であったが、単なる学会の参加費用が研究費から支出されていたため、研究課題の研究計画との関連を分担者所属機関へ問い合わせるよう求められた。（研究分担者から後日説明書が届く予定）
- ・取引業者の伝票に関して、伝票の番号類（枝番号等も含む）の仕組みと日付の連動等についても調査することが求められた。（取引業者からの説明を受け、見積から発注に至らないことがあるのでずれることがあることを説明した。）

《改善対策》

本学としては、今回の検査を通じて公的研究費の処理については、これまでのような甘えは許されず厳正に対応していくことが求められていることを痛感し、直ちに改善対策を講じていくことといたしました。

各教員は今後の研究活動において、研究費の交付に伴う規則をよく理解し、手続、規定を守るようお願いいたします。本学が今後とる改善策等の詳細については決定次第逐次お知らせしていきますが、おおよそ次の対応を予定しております。

（１）平成19年度分の厚生労働科学研究費実績報告書の提出における対応

大学事務部内に職員選抜の対応チームを結成し、研究課題の実績報告を分担して書類点検を行ったうえで主務官庁へ報告することとします。

（２）平成20年度以降の取り組み

【公的研究費取り扱い専門部署の設置】

研究支援課設置：三鷹キャンパスに公的研究費を管理し経理事務を担当する部署を設置すると共に専任職員を配置します。

【公的研究費管理方法の変更】

研究支援課では、既に大学として取り組んでいる文部科学省交付分・日本学術振興会交付分の科学研究費補助金の取り扱いと同様に、厚生労働科学研究費等の公的研究費についても一括で管理を行うこととします。

従いまして、今後は、物品発注・検収・納入及び支払を研究支援課が行うこととし、謝金等支払も研究支援課が源泉徴収を行ったうえで立替処理を行います。また、旅費清算方法についても、原則半券及び領収書を添付してもらうなど厚生労働省等が示している手続き、方法を守っていただくことになります。

平成20年度入試を振り返って 志願者前年比9%増を達成

入学センター長 岸 邦和

大学全入時代を迎えての危機感から、平成20年度入試はこれまでに比べて大幅な変更を行いました。日本能率協会の野口 淑氏のアドバイスの基に、高校訪問の見直し、交通広告と新聞広告による知名度の拡大、入試対策セミナーとオープンキャンパスによる高校生への直接の働きかけ、などの新たな施策が募集プロジェクトとして実行しました。加えて、医学部では予備校訪問、各学部では入試広報の強化や入試日程の工夫などを行いました。

その結果、前年度に比して志願者が793名増加した（前年比109%）。19年度までは前年比5%～15%の減少が続いていたことを考えると、20年度の入試広報は成功であったと結論できると考えられます（表1参照）。とはいえ、志願者一人を目指していたのに対して、18年度の志願者を回復したところで、21年度には、今年の萌芽をさらに成長につなげて志願者一人を目指したいと考えています。入学者数が確定するのは4月初旬ですが、昨年入学定員を満たすことができるかと心配した文系2学部が、入学者数の上限としている入学定員の1.25倍も視野に入るほどの合格者を出すことができたことも特筆すべき成果です。

募集プロジェクトは入学センターに新たな目標と広報スキルをもたらししました。今後につなげる体制の確立を図りたいと思います。

この機会をお借りして、多忙な業務の中進学アドバイザーとしてご協力いただいた職員の方々、手薄になった各部局で業務に当たられた職員の方々、そしていろいろなイベントでご協力いただいた各学部の教員の方々に感謝いたします。

（表1）

試験区分	学科名	募集人員	志願者数						
			H20	H19	増減	前年比	H18	18⇒19増減	19/18比
医学部	医学科	90	3,497	3,492	5	100%	3,754	-262	93%
保健学部	臨床検査技術学科	80	1,082	1,005	77	108%	1,265	-260	79%
	健康福祉学科	40	399	384	15	104%	821	-437	47%
	看護学科	80	1,912	1,349	563	142%	1,334	15	101%
	臨床工学科	40	344	388	-44	89%	266	122	146%
	救急救命学科	40	317	321	-4	99%	—	321	—
	学部合計	280	4,054	3,447	607	118%	3,686	-239	94%
総合政策学部	総合政策学科	179	614	560	54	110%	715	-155	78%
	企業経営学科	119	344	323	21	107%	262	61	123%
	学部合計 ^{*)}	298	958	883	75	108%	977	-94	90%
外国語学部	英語学科	107	491	381	110	129%	553	-172	69%
	中国語・日本語学科（語学）	67	99	70	29	141%	89	-16	82%
	応用コミュニケーション学科	107	266	299	-33	89%	245	54	122%
	学部合計 ^{*)}	281	856	750	106	114%	887	-137	85%
全学部		949	9,365	8,572	793	109%	9,304	-732	92%

平成19年度 就職状況ならびにキャリアサポートセンター事業報告

■平成19年度（平成20年3月卒）就職状況について

八王子3学部における当年度の就職率は97.1%で、昨年と比較し3.3%伸長しました。学部ごとの就職率は、保健学部95.1%、総合政策学部97.6%、外国語学部98.5%です。

■平成19年度キャリアサポートセンター事業報告

キャリアサポートセンター（以下CSCと表記）は、卒業後の進路を見据えた1・2年生からのキャリア形成支援と就職活動を迎える3・4年生には具体的な就職活動支援を行っています。また、就職活動支援事業は、平成19年4月からCSC学年暦として学生に提示し、参加意欲を高められるよう工夫しました。これらの事業をとおして、杏林大学のブランド高揚に繋がることをCSC職員が意識して、学生との対話・サポートの充実を図っています。

平成19年度は6項目の事業に取り組みしましたので、下記のとおり結果を公表します。今後とも教職員のご支援とご協力をお願いいたします。

1. 社会人基礎力の養成を主眼に、1・2年生からのキャリア支援を実現

八王子3学部の1・2年生対象の授業やガイダンスなどで、将来のキャリア構築に向けた支援を展開。主な支援事業は以下のとおりです。

- ①キャリア支援講座
- ②基礎能力（一般常識）試験の導入
- ③社会（企業）見学の実施（19年度新規導入）
- ④ジョブカフェ（19年度新規導入、企業の人事担当者を招聘し、業界・企業研究及びマッチングを実施）

○主な支援事業と参加学生数

	支援事業	支援内容	備考
1・2年生	授業等への出張講座（総・外663名） インターンシップ（CSC提供分4名）	基礎能力テスト（総・外531名受験） 一般常識試験（保健236名受験）	個別面談は随時
3・4年生	ゼミ等への出張講座（総・外608名） インターンシップ（CSC提供分42名） ジョブカフェ（保・総・外386名）	基礎能力テスト（総・外484名受験） 一般常識試験（保健92名受験） 社会（企業）見学 ※（保・総・外33名）	個別面談は随時 就職模擬面接は随時 就職模擬テスト（保・総・外380名受験） 就職実践セミナー（保・総・外130名参加）

※社会（見学）企業：ソニー（保12名）、スリーポンド（総・外3名）、海上自衛隊（総・外10名）、江東微生物研究所（保8名）

2. 学部カリキュラムとの融合を図り、就職意識の醸成を目指す

総合政策学部及び外国語学部の授業科目（特にゼミ等）に、CSC職員が出向いて、就職に関する情報や資料の提供、企業の採用状況について、直接学生に説明。利点として少人数で実施できるため、質問形式や学生参加型の講座が可能になりました。

○1・2年生対象

	実施科目数	受講学生	主な科目名
総合政策学部	22科目	330名	読解力・文章力演習、2年ゼミ
外国語学部	13科目	333名	キャリア指導Ⅰ・Ⅱ

○3・4年生

	実施ゼミ数	受講学生	ゼミ実施率
総合政策学部	18ゼミ	329名	58%
外国語学部	19ゼミ	279名	56%

3. インターンシップにおける積極的な学生派遣を行い、就職意欲を高める

会社や仕事を知る機会として、2・3年生の夏休みを利用して企業で就業体験を実施。平成19年度は53社125名（目標は100社100名派遣）の学生が研修に参加しました。

○インターンシップ研修

	派遣社数	派遣学生数	備考
総合政策学部	26社	38名	
外国語学部	27社	87名	国内・国外含む

※数字は、学部派遣・CSC派遣の合計

4. ジョブカフェによる年間を通じた企業研究・会社概要等々の情報提供を進める

企業の人事担当者を招聘して毎週水曜3限に、企業・職種研究、採用情報の収集及び人事担当者とのマッチングを実施。対象は1年から4年生までで、企業の方に90分間自由に使ってもらい、低学年にも理解しやすい言葉で説明していただきました。

前期（4～7月）の来校企業は11社で、学生参加は228名。後期（10～1月）は11社で、学生参加は158名でした。

○前期

東京消防庁
警視庁
ワールドストアパートナーズ
防衛省（自衛隊）
トップツアー（旧東急観光）
ソフトバンク・テクノロジー
リゾートトラスト
サンドラッグ
東京めいらく（スジャータ）
ツツミ（ジュエリーツツミ）
トヨタ西東京カローラ
4年生内定者との対談

○後期

毎日コミュニケーションズ
テンプスタッフ
日本デジタルデザイン
積水ハウス
業界研究（リクルート）
エービーシー商会
多摩信用金庫
家族亭
ソニーリージョナルセールス
プリンスホテル
スリーポンド
4年生内定者との対談

5. ホームページを刷新し、内外への発信の拠点とする

学園のホームページのリニューアルに伴い、CSCのHPを刷新しました。主な改善は、

- ①訪問者別（学生・卒業生・一般・企業）にアクセスしやすいメニュー画面に変更。
- ②特別な情報を、バナーを利用し目立たせた。
- ③企業等で活躍する卒業生を訪問し、会社概要や本人の業務内容を紹介するコーナーを新たに設置した。
- ④「進路決定届」の入力・送信が、自宅のPCからできるようにした。
- ⑤求人情報を「学生ポータルシステム（GAKUENシステム）」を介して閲覧できるようにした。

上記により、有益な就職情報、企業情報等をリアルタイムで提供するとともに、求人情報配信、企業紹介、ビジネスマナー講座、活躍する卒業生紹介等々の情報提供も進めています。さらに、平成20年度は卒業生の就職支援も視野に入れて活用していきます。

CSCHP：<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/center/career/index.html>

6. 当センター職員の専門職としての能力向上を目指す

職員の能力向上の一環として、各種研修会（①業界・企業・職種研究、②聴く力・引き出す力を体験型ワークで身につける、③女性の仕事とライフスタイル）に参加し、知識の吸収と情報収集を図っています。

また、出張ゼミ講座やキャリア・就職ミニ講座のカリキュラムを各自が計画・作成し、実践しているとともに、学生が話しやすい環境作りと面談・模擬面接技術の向上を図っています。

（キャリアサポートセンター）

八王子だより

保健学部 嶋津教授の研究グループ「新機械振興賞」受賞



保健学部生理・生体工学教室の嶋津秀昭教授の研究グループが開発した「痛み定量化装置」が、2月6日（水）東京プリンスホテルで行われた第5回新機械振興賞の表彰式で「財団法人機械振興協会会長賞」を受賞しました。表彰式では嶋津教授のグループを含めた6団体が「財団法人機械振興協会会長賞」を受賞したほか、「経済産業大臣賞」「中小企業庁長官賞」にそれぞれ

れ1団体が表彰されました。

「新機械振興賞」は財団法人機械振興協会が、機械工業に係る優秀な研究開発及びその成果の実用化によって機械工業技術の進歩・発展に著しく寄与したと認められる大学や企業、研究開発担当者などを「経済産業大臣賞」「中小企業庁長官賞」「財団法人機械振興協会会長賞」としてそれぞれ表彰するものです。

今回 嶋津教授のグループが受賞した研究機器「痛みの定量化装置」の開発は、嶋津教授はじめ研究室のメンバーを中心に進められ、痛みのレベルを数値化できる知覚・痛覚定量分析装置として「ペインビジョン」という商品名で、株式会社オサチを通じて製品化され、平成18年4月より株式会社ニプロより全国医療機関向けに販売されています。

【受賞にあたり】

嶋津 秀昭

本装置は杏林大学保健学部において過去実施されたプロジェクト研究費を元にはじめられた研究であり、十年あまりを経てようやく社会にその成果を提供できるようになりました。学会賞もいくつか頂いていますが、研究だけで終わることなく、医療機器として提供できたことを喜んでいます。

今後、臨床の場で役立てられれば幸いです。

第4回 同窓保健師交流会を開催して一つながる杏っ子たちの輪—



保健師として働いている同窓生と保健師になろうとしている同窓生をつなぐ「同窓保健師交流会」。4回目を迎える今年は、保健学部就職委員会と杏里会のご支

援を受けて、3月15日（土）に八王子市学園都市センターで開催し、43名の参加がありました。

前半は「先輩保健師の話をきく会」。保健師に興味のある在校生を対象に、4月から保健師として働く4年生と保健師1年目の先輩が就職活動の秘訣を語りました。「あきらめないことが大事」というメッセージが心に響きました。

後半は、現在保健師として働いている同窓生と今春から就業予定の同窓生が集まり、保健師として働く上で遭遇した困難とそれを乗り越えてきた体験を語り合いました。就業者からは「自分の成長を実感できた」

「皆がんばっているとわかり、励みになった」「相談できる相手がみつかった」「他の自治体のようすがわかった」、就業予定者からは「保健師1年目ならではの困難の乗り越え方がきけてよかった」「自分も先輩と同じように悩みながらもがんばりたい」と好評でした。

本学を卒業して保健師になる杏っ子たちの輪が広がっていくよう、来年度の同窓保健師交流会は3月15日（日）に開催予定です。

保健学部看護学科地域看護学研究室
大木幸子教授・山口佳子准教授・太田ひろみ准教授

多胎育児交流会「ツインズマーケット」を開催して



多摩地域の多胎育児サークルの交流を目的として『多摩多胎ネット』が主催する「ツインズマーケット」が、3月8日（土）八王子キャンパスで開催されました。今年で3回目を迎えるこの会には、『多摩多胎ネット』の会員と多摩地区保健センター等で情報を得た母親40名、父親36名、祖父母5名とふたご36組、みつご2組、兄弟10名のあわせて169名が参加しました。保育は本学の学生と卒業生、教員のほか、子育てが一段落したふたごのママ、保育士、保健師など45名のボランティアが行い、参加者と合わせて214名が集う盛大なイベントとなりました。

今回のプログラムは、前半はフリーマーケット、後半は夫婦で協力しながら多胎育児を乗り切ろうというテーマで『パパとママのためのディスカッション』と月齢別グループワークでした。『パパとママのためのディスカッション』は、夫婦がお互いに相手のよいところや日頃感じている思いを言葉にして伝え合うというもので、ボランティアが子どもを預かり夫婦だけで話し合える場としました。夫から妻へは「いつも家事育児を頑張っている」「ふたりを産んでくれたことに感謝」「忙しいのに心配りが行き届いている」、妻から夫へは「いろんなことを手伝ってくれる」「ストレスをぶつけても黙って聞いてくれる」「仕事を頑張ってくれる」など、日頃面と向かってはなかなか言えない感謝の言葉が沢山聞かれ、日々の苦勞が報われる心温まる時間となりました。

月齢別グループワークは、子どもの月齢ごとに6～10名のグループに分かれ、それぞれにふたご育児の先輩パパママ、あるいは保健師等が加わって意見や情報の交換をしました。「断乳はどうしたらよいか」「トイレトレーニングはいつから始めるのか」など、子

どもの発達段階に応じた育児上の悩みや、「夫がいないとき二人をお風呂に入れる方法は」「ふたりを平等に育てるには」「公園でふたりを安全に遊ばせるには」など、ふたご・みつごを持つ親ならではの悩みが多く聞かれ、それに対し経験者や保健師などから具体的なアドバイスや「ふたりを同じと考えるのではなく、ひとりひとりの個性や長所を見るようにしてみれば」「ひとりで頑張らず誰かの手を借りるもの大切」などの子育てのヒントとなる話がされました。

今回はあえて講演会等を企画せず、夫婦や同じ月齢の子を持つ親同士の交流がメインでしたが、参加者からは「同じ悩みを持った人がいて自分だけではないと思った」「日頃子どもと離れることがないのでゆっくり話ができてよかった」「相手のよい点を言い合うすぐくよいディスカッションだった」「父親同士で集まる機会がないので話ができてよかった」など、満足した感想が寄せられました。

学生達は「昨年抱っこしていた赤ちゃんが元気に歩いている姿をみて子どもの成長の早さを実感した」「ふたごやみつごを育てるご両親の苦勞や楽しさがわかった」「サークルを維持することや拡大することの必要性や大変さを感じた」「専門職としてサポートすることが必要だということがわかったなど」などの感想を挙げており、このイベントに参加したことが多胎児や多胎育児の現状の理解に繋がり、今後の学習の動機づけにもなったようでした。

今回は予想を上回る参加者があったことから、このような取り組みのニーズの高さを実感し、地域における大学の果たす役割が大きいことを再認識しました。今後も、多胎児を育てている家庭、多胎育児サークル、育児支援者が相互に連携して、多胎育児の現状を改善し、楽しく育児を行っていけるように『多摩多胎ネット』の活動をより発展させていきたいと考えます。最後に、今回の活動に対してご理解とご協力を頂きました大学関係者の皆様、多くのボランティアの方々には感謝申し上げます。

母子看護・助産学教室：佐藤喜美子准教授・
佐々木裕子講師・山元有佳学内講師
地域看護学教室：太田ひろみ准教授

平成20年2月国際交流センター付属別科日本語研修課程修了式



2月6日（水）八王子キャンパスで別科日本語研修課程修了式が行われました。別科修了生3名と外国語学部高度日本語研修プログラムを受講していた交換留学生、委託学生、教職員の方々が多数、参列されました。

別科長であり国際交流センター長の塚本尋教授からは、「おめでとうございます。20年前に別科が創設された時は、学部進学者のための日本語教育機関として数少ない存在でしたが、時が流れ、今年度で別科を終了とすることになりました。今後は、日本語能力のある学生に対しての教育機関である高度日本語研修プログラムとして新たなスタートをきります。みなさんも

杏林を忘れずに大きく羽ばたいて下さい。」

清水淑子保健学部教授からは、「おめでとうございます。私も3月で定年退職を迎えるにあたり、気持ちの上ではみなさんと同じ境遇であります。他国にいると母国心が育っていくものです。日本に留学したことによって、日本や母国を良く見て、よりよい世界にしていってほしいです。一生勉強、一生青春をモットーにしています。張り切って人生を歩んで下さい。」とのお言葉をいただきました。

先生方からの祝辞を受け、許寧さんが答辞を読みました。「昨年4月にそれぞれの夢を持ち杏林へ来ました。先生方の存在は親元を離れた私たちにとって、心強いものでした。高度研修プログラムに参加できたことは、とても有意義で、勉強と盛んに行われた交流とで生活は充実していました。本日をもって別れるのがとても辛いです。いつか自分達も羽ばたける日々がくることを信じています。」と涙ながらに読む姿は、参列者皆の心に伝わりました。別科は本年で終了致しますが、別科で培った事を活かして、修了生それぞれが活躍してくれることを願っております。

（別科事務係）

三鷹だより

整形外科丸野助教が米国骨代謝学会のYoung Investigator Awardsを受賞



ワシントンでの授賞式。右が本人。左は徳島大学大学院教授で日本骨代謝学会理事長の松本俊夫先生

医学部整形外科学教室の丸野秀人助教が2007年米国骨代謝学会（ASBMR）のYoung Investigator Awardsを受賞し、2007年12月6日から7日まで、米国ワシントンDCで開催されたASBMR主催の会場で顕彰されました。

Young Investigator Awardsは、毎年開催される骨代謝関連の学会では国際的に最も権威のある米国骨代謝学会における新人の発表者の中から、審査員の投票により優れた研究に授与される大変名誉ある賞

です。いわば、骨代謝関連研究領域の新人賞のようなものです。

丸野助教の研究題目は「Effects of Intermittent Administration of Parathyroid Hormone (1-34 hPTH) on Distraction Osteogenesis in Rabbits.」で、兎の脛骨を骨切りした後創外固定を用いて骨を延長しますが、その際に上皮小体ホルモンのヒトPTHを投与することにより、骨新生が促進され、延長化骨の力学的強度が増強されるという研究です。この研究により、創外固定の装着期間の短縮が期待されるなど、臨床的にも大変意味のある貴重な基礎研究です。

PTHは海外では骨粗鬆症の治療薬として認可されていますが、また、スポーツ選手の骨折の治療を促進する目的で使用されているようです。本邦ではまだ治験段階ですが、この研究が臨床に応用される日もそう遠くないものと期待されます。

（医学部整形外科学教室准教授 市村正一）

医学図書館での情報リテラシー教育環境の整備

医学図書館では、教育・学習方法等改善経費（私立大学等経常費補助金）を利用して、情報リテラシー教育環境の整備を進めています。

今回の整備では、2階カウンター前の文献検索エリアにプラズマディスプレイを2台設置しました。あわせてレポート用PC 8台もここに移設し、このエリアでは合計24台のPCがインターネット接続できるようになりました。医学図書館では、今後これらの機器を使って、情報リテラシー関係の講義やセミナーを開催する予定です。

また文献検索エリアのそばの雑誌書架を入れ替えました。新書架にはこれまでのような蓋がないので、雑誌に触れやすい点、バックナンバーを探しやすい

点、収納効率が高い点が大きな特徴です。医学分野では、冊子体の学術雑誌も重要な情報源のひとつなので、今回の新書架入れ替えによって、それらへのアクセス向上を目指しました。

2階閲覧エリアでは、レポート用PCを移設させた跡に机の配置を変更し、44座席を確保しました。レポート用PCの座席は、移設先にこれまでと同数の8席があるので、今回の整備で、新たに16席が増えたことになります。

医学図書館では、これからもサービスや館内レイアウトの見直しを行い、利用者みなさまにとってより使いやすい図書館の実現を目指していきます。

病院ホームページのリニューアルにあたって

本年3月に病院ホームページをリニューアルしました。新しいホームページは、「親しみがあり、伝わりやすく、見やすい」をコンセプトにしております。フォーマットや色使い、一行の文字数に至るまで、細部にこだわりをもったデザイン構成を行い、皆様に病院の情報をわかりやすく伝えられるよう作成されています。

新しい試みとして、医師一人一人の人物像に踏み込んだ「当院のドクター紹介」や、杏林大学医学部附属病院ならではの画期的な診療内容をまとめた「各診療部門の取り組み」をトップページに掲載しま

した。これらを通じて、有能で暖かい人柄を兼ね備えた当院の医療スタッフと優れた医療内容の存在を広く世間に知って頂ければ、と思っております。教職員の皆さんの積極的な情報発信の協力をお願い致します。

この新しいホームページが、杏林大学病院を親しみやすい病院として地域に浸透させることに貢献するとともに、盛んな情報発信の場となり、病院内外のコミュニケーションの活性化に寄与する手段として活用されることを願っております。

（病院企画運営室長 松田剛明）

本院の医師と看護師が大規模救助救急演習に参加

2月29日、京王線飛田給駅及び北口駅前広場で、東京消防庁調布消防署が主催した救助救急演習が行われ、消防隊、施設関係者のほか、本院から東京DMA T隊員の救急医学 八木橋 厳助教、高度救命救急センターの古田麻実子看護師が訓練に参加しました。

大規模救助救急演習に参加して

救急医学 八木橋 厳

2月29日午前10時から行われた、京王線飛田給駅大規模救助救急消防演習に古田看護師とともに参加した。

演習想定は、ホームから転落した女性を救助しようとした男性3人が駅構内に入線した電車の急ブレーキにもかかわらず、1名が電車の下敷きになり、車内では急ブレーキにより乗客が20名負傷したという大掛かりなものでした。

発災の合図とともに、消防車・救急車がサイレンを鳴らし駅ロータリーに集結し、駅構内に駆け込むとこ

ろから訓練が始まりました。私たちは、消防の連携隊の車で駅ロータリーに到着。すぐさま現場指揮官である調布消防署の大隊長に到着の報告をし、事故の内容と現場の状況の伝達がされ、現場に急行しました。

消防隊員の先導により駅係員の誘導のもと、資機材を担いで駆けつけたホームには、負傷者役の多数の模擬患者が、担架や係員によって搬送・救出されていました。電車の先頭に行くと車両の下に挟まれた模擬患者が、今まさに救出を待っている状態でした。先着し

た救急隊員が頸椎固定と酸素投与を行っていました。私たちは線路下に降り立ち、患者の意識レベルの確認後、気道確保・呼吸状態・循環動態の確認を行い、輸液路の確保を行いました。その後、レスキュー隊員が車体を持ち上げ患者を救出。担架で患者をホームに移動させ、駅の外に搬送後、スーパーアンビュランス（特殊救急車）に移送、トリアージを再施行するとともに

に患者のバイタルサインの確認を行い、訓練は終了しました。

私は実際にJR三鷹駅構内で発生した同様の事故に対して出動した経験がありますが、今回の訓練はそのときと同じような緊張感のある有意義な訓練でした。このような訓練を行うことで、同じような事故の際には十分な活動が行うことができると思いました。

看護部自衛消防訓練実施 —地震体験・煙体験—



三鷹キャンパスで恒例の総合防災訓練が2月23日（土）午前10時より行われました。この訓練は付属病院看護部業務管理委員会と総務部が協力し、地震等の災害時に患者様や自分の安全を確保する為にどのように行動したらよいかを学ぶために毎年実施しているものです。

松田記念館前に集合した看護師80人、医師・自衛消防隊員・職員・学園関係事業所等45人のあわせて

125人は三鷹消防署の指導員より訓練実施にあたり説明を受けた後、看護専門学校第2校舎および松田記念館前の二班に分かれて訓練を開始しました。

訓練は松田記念館前で起震車による震度7までの地震体験、屋内消火栓による放水訓練、看護専門学校華道室内に煙を充満させ、濃煙内から脱出する体験訓練の3種類を行いました。この後看護専門学校音楽室で平成7年1月17日の阪神淡路大震災の映像を観て最後に三鷹消防署員より「入院中の患者さんは普段我々が何気なく行っている動作が出来なくなる。どうすれば患者さんが災害のときに不安を抱くことのないように避難誘導が出来るかをイメージして下さい。」といった、患者様に対する地震への備えと心掛けの話があり訓練は終了しました。

（総務部・看護部）

文化・スポーツ

アメニティ・学生部会企画 衆議院と憲政記念館見学ツアーを実施



アメニティ・学生ネットワーク部会は、学生が学びやすい教育環境づくりと学びの機会を提供するための取り組みの一つとして、2月28日（木）「衆議院と憲政記念館見学ツアー」を実施しました。

当日は総合政策学部の学生12人と保健学部の学生1人、引率の教職員6人が参加して、13時に衆議院を見学したあと、憲政記念館や内閣府を訪問しました。国会では予算案と税制関連法案の審議が行われており、学生たちは いままさに国政の重要案件が審議されて

いる場の緊張感を実感したようでした。

憲政記念館では日本の歴史を動かしてきた人物の縁の品や時代背景などの資料をじっくり見学することができました。最後に訪問した内閣府では、内閣府特命担当大臣の渡辺喜美衆議院議員の部屋を訪問し、政策担当秘書の堀越富士夫氏より、大臣の職務や多忙なスケジュールなど普段伺うことのできない話を聞かせていただきました。

この企画は総合政策学部 豊島典雄教授（現代日本政策論、マスコミュニケーション論）の発案を学生ネットワーク部会が支援して実施したのですが、見学者には事前に学習会を受けることが課せられ、今回の見学先や日本の政治の変遷について豊島先生が講義を行いました。その甲斐もあり、学生はそれぞれ意欲的に見学会に臨むことができたようです。また、訪問先へのアポイントメントなど事前の準備は豊島先生のア

ドバイスをもとに学生が行ないました。見学会は立法府の知識を深めると共に、国会という場には様々な人が関与していることも実感できるなど、就活の視野を

広げる一助となったようです。

【ホームページで全参加学生の感想を掲載しています】

2月の理事会

平成20年2月18日（月）

- 議案
- ・ 役職規程等に基づく大学役職者の選任について
 - ・ 寄附行為第6条第1項第4号及び第5号理事の選任について
 - ・ 寄附行為第23条第1項第1号評議員候補者の評議員会への推薦について
 - ・ 寄附行為第18条の2 参与の委嘱について
 - ・ 顧問会計士、顧問弁護士、顧問税理士の委嘱について

各種助成金

財団法人 日本ワックスマン財団 平成20年度学術奨励研究助成金

氏 名	所属	研究課題	助成金額
田口晴彦	保健学部臨床検査技術学科・教授	マイコプラズマ肺炎発症メカニズムにおける宿主免疫応答の役割	1,000,000円

大学共同利用機関法人 自然科学研究機構

代表研究者	所属	研究課題	助成金額
高見 茂	保健学部/大学院保健学研究科教授	凍結切断法を用いた一次嗅覚路の解析	233,720円 (消耗品費、旅費)

財団法人 中富健康科学振興財団 平成19年度（第20回）研究助成金

氏 名	所属	研究課題	助成金額
櫻井拓也	衛生学公衆衛生学教室・助教	運動による脂肪細胞の抗酸化システム構築とその分子機構の解明	1,000,000円

寄付金申込者芳名

（平成20年2月分）

教育研究寄付金

名前のみ掲載 日本シャウッド様
東通産業様

匿名寄付（1件） 金 25,000,000円

一般寄付金（教室分）

匿名寄付 24件 22,500,000円

（内科学Ⅱ、内科学Ⅲ、眼科学、感染症学、救急医学、形成外科学、外科学、高齢医学、産婦人科学、耳鼻咽喉科学、心臓血管外科学、生化学、整形外科、精神神経科学、脳神経外科学）

このたびは本学園の募金事業等にご理解をいただき、多大なるご支援を賜り誠にありがとうございます。皆様からのご寄付はご芳志に沿って、有効に活用させていただきます。

第37回日本脊椎脊髄病学会のご案内

会期：2008年4月24日（木）～4月26日（土）

会場：京王プラザホテル（新宿）

会長：里見和彦（杏林大学医学部整形外科教室 教授）

『神経学に基づいた脊椎手術

- Spine Surgery based on Neurology-』

《主催事務局》

第37回日本脊椎脊髄病学会事務局

杏林大学整形外科内（担当：市村、高橋）

E-mail：jssr37@kyorin-u.ac.jp





教職員メディア情報

新聞・雑誌・テレビなどマスコミの取材を受け、テレビに出演したりあるいは記事に掲載された教職員の皆さまを各号でご紹介します。

田久保 忠衛 杏林大学客員教授	2月15日 産経新聞	正論：シリーズ大統領選挙 米大統領選挙の各候補者の外交、防衛、国内政策などについて解説
島崎 修次 医学部教授	2月20日 読売新聞	救急機関減が背景 経営難、医師確保難しく 搬送拒否死亡例を受け、2次救急医療機関の実情について解説
	3月2日 朝日新聞	救急医療を救うには 医師の激務 見合う報酬を 救急医療の厳しい現状について解説
	3月11日 朝日新聞	救急難民 続出 都市部の病院、疲弊 救急部門の診療報酬を増やし、勤務医の待遇改善につなげるのが急務と指摘。
古賀 良彦 医学部教授	2月22日 毎日新聞	香りのα波効果 研究 ストレス解消法やストレス対応について解説
山口 芳裕 医学部教授	3月1日 NHK総合テレビ	「ニュース7」 冷凍ギョーザ事件に関連して本院・高度救命救急センターの有機リン中毒への対応について紹介。
小林 治 医学部講師	3月5日 NHK総合テレビ	「おはよう日本」 『上海で新型インフルエンザ』 感染を防ぐには日頃の手洗い、うがいが効果的であると解説。
杏林大学病院	3月3日 読売新聞	病院の実力 人工関節治療実績が紹介される
	3月30日 読売新聞	病院の実力 心臓カテーテル治療実績が紹介される
	4月6日 読売新聞	病院の実力 心臓外科手術治療実績が紹介される
杏林大学 八王子キャンパス	まっぶるマガジン多摩 2月22日号	立川・八王子・町田エリア特集 市民対象の大学の公開講座、キャンパス施設紹介などで写真とともに紹介される
杏林大学 硬式野球部	3月6日 大分合同新聞	杏林大学硬式野球部 佐伯市でキャンプイン 3/2-11 佐伯市で春季キャンプをした硬式野球部。市長を表敬訪問した荻本監督の写真とともに紹介
古森義久 杏林大学客員教授	W i L L 2008年5月号	総力特集 中国の暴走が止まらない アメリカ議会から見る中国問題を10ページにわたり解説
杏林大学病院	講談社 『医師がすすめる最高の 名医+治る病院 [決定版]』	「がん・心臓病・脳卒中・メタボリック症候群・歯」の名医・病院 「脳卒中」「がん」「メタボリックシンドローム」の分野で本院と専門分野の医師が紹介される
齊藤元秀 総合政策学部教授	リベラルタイム 5月号	「米経済」失速で甦る強国・「ロシア」の計略 「EU・日本」に接近「米中」を牽制する対外戦略としてロシアの外交政策の展望を分析

このコーナーは皆さまからの情報提供により構成されています。広報・企画調査室 koho@kyorin-u.ac.jp

お詫びして訂正します

広報誌あんず2月号に誤りがありました。お詫びし訂正いたします。

- ・14ページ KR日より
損益計算書対比表 誤) 第9期実績→正) 第9期予測
- ・P23ページ 寄付金申込者芳名
一般寄付金(教室分) 誤) 医科学Ⅰ、内科学Ⅰ、内科学Ⅱ
→ 正) 内科学Ⅰ、内科学Ⅱ、内科学Ⅲ

発行 平成 20 年 4 月 25 日
あんず編集委員会
東京都三鷹市新川 6-20-2
連絡先 TEL 0422-(44)-0611 広報・企画調査室